

学びの風便り

リーディングスクール通信65 R8.7.31(金)



発行：松本市教育委員会 教育研修センター

学びの改革のあゆみ 旭町小学校・岡田小学校

旭町小学校～「私たちの本音」からはじまる学校づくり～

～リーディングスクール2年目・旭町小学校の歩みと挑戦～

松本市が推進する「みんなの未来の学校(みんなミラ)」。子どもたちの視点に立った新たな学校づくりを目指す中で、研修主任の金字先生はある問いと向き合っていました。「対話やふり返りが、どこか決まりきった形になっていないか?」「私たち自身が心からワクワクして授業をつくりけているか」…。リーディングスクール2年目を迎えた旭町小学校は、「これまでの自分たちの当たり前」を一度立ち止まって見つめ直すことからスタートしました。7月には、昨年度に引き続き計画休を活用して軽井沢風越学園のアウトプット日を視察しました。帰校後のリフレクション研修では、風越学園で感じた「スッキリ」や「モヤモヤ」を持ち寄り、「脱・マジメ」「主語は私」「モヤモヤ大歓迎」といった気軽なルール(グランドルール)の下で語り合いました。「公立だから」「今までそうだったから」といったフレームを一度外してみると、前例踏襲になっていた慣習への気づきや、「本当はこうしてみたい」という先生方一人ひとりの素直な本音が少しずつあふれてきました。

「学習者」となり、「探究のプロセス」を体感する

夏休みのサマーセミナーでは、教員自身が「学び手(学習者)」になる時間をもちました。研修主任の金字先生が総合教育センターでの体験を基に企画した「チョコレート探究」です。

新聞紙で包まれた中には、一人一人違ったチョコレート。パッケージをじっくり眺めて気づきをメモする人、カカオ豆やカカオニブをかじって苦味に驚く人。学校図書館から集められた本を次々とめくって疑問を調べる人もいれば、持参した電子秤で「内容量の精度」を測り始める人まで……。先生方はそれぞれの興味に向かって、夢中になっていました。



ワークの後半では「教師」の視点に戻り、自分の感情や思考の動きを振り返ってみました。すると面白かったのは、チョコレートという同じ材を扱い、同じ空間にいたにもかかわらず、心が動いた瞬間も抱いた疑問も「人それぞれだった」ということです。

探究のプロセスは、全員が同じ「課題設定→情報収集…」という型通りに進むわけではありません。子どもたちが「やりたい!」と自分から動き出す背景には、一人ひとりのつまずきや興味に寄り添う関わりや、思わず手に取りたくなる仕掛け(学習環境デザイン)があったのだと、自分たちの体験を通して実感することができました。

子どもの「目が輝く瞬間」を支える日常へ



「教室のあの場所に、子どもが興味を持ちそうな本を1冊置いてみようかな」「指示で縛るのをやめて、子どもが自分で選べる場面を増やしてみよう」——研修を終えた後の会話では、夏休み明けの日常に向けた小さな実践のアイデアが自然と交わされていました。まずは私たち大人が学びを楽しみ、本音で語り合いながら、子どもたちが生き生きと過ごせる環境を工夫してみる。

旭町小学校はこれからも、試行錯誤を重ねながら「子どもの目が輝く瞬間のつくり方」を探究し続けていきます。

岡田小学校 のびのび・わくわく・どんどんチャレンジできる学校へ

岡田小学校では今年度、学校づくりのテーマとして、「岡田小みんなミラ大作戦 ～みんながのびのび わくわく学び どんどんチャレンジできる学校を目指して～」を掲げています。

自分で選び・決める主体的な子どもの姿と、それを支える教職員の温かな関係づくりを目指した、岡田小学校の１学期の歩みをご紹介します。

■ 対話から始まる！先生たちの関係づくりと課題設定

学校づくりのスタートにあたり、岡田小学校がまず大切にしたのは「先生同士の関係性を深めていくこと」です。４月２７日には、「ホワイトボード・ミーティング」の手法を活用した職員研修が行われました。この研修では、「オープクエスチョン」を意識した対話のよさを体験しながら、先生方がそれぞれの「自己課題の種」について和やかに語り合いました。活発な対話を通して相互の親密な関係を深めるとともに、各自が今年度取り組んでいきたい研究課題を明確にすることができました。

■ 「授業クリニック」で「わくわく」の仕掛けを学ぶ

１学期のまとめの時期にあたる７月には、麻布教育ラボの村瀬 公胤先生を招いて「授業クリニック」を実施しました。研修会では、岡田小の合言葉である「のびのび わくわく どんどん」に即して、子どもたちの学びの素晴らしい姿が紹介され、さらに、子どもたちが主体的に夢中になって取り組む授業づくりの手がかりとして、以下のようなキーワードが共有されました。

「いつでも おとなりさん」

正解を確認して終わるのではなく、「これってどう思う？」と自然におとなりさんに聞いて関わり合える関係を育むことを意識。試行錯誤する子どもの姿を肯定的に見守り、子ども同士の学び合いを促す。

「W型の問い」

「～について考えよう（Let's型）」と方向性を示すだけでなく、「Which（どっち）」「What（なに）」といった具体的な選択や探索を促す問いかけにすることで、子どもたちが思いや考えを具体化しやすくなる。

このように、子どもたちが安心感をベースに、ちょっと難しいことにも挑戦できる「インクルーシブ」な環境づくりのヒントをたくさん得ることができました。

■ １年生の「やりたい」が動かした「七夕」の学び

こうした学校づくりの方向が、子どもの学びの姿にも表れています。

７月、１年生は６年生と交流しながら自分たちの「七夕」を作りました。まず、七夕への思いを持ち寄り、「短冊を書きたい」「飾りを作りたい」「６年生と遊びたい」など、自分たちがやりたいことを出し合いました。そして友達の意見を聞きながら、具体的な活動を１つずつ決めていきました。



１年生の願いを受けた６年生は、飾りの作り方を調べ、動画や見本を用意するなど、思いをかけて準備をしました。そして、交流の当日には、１年生ができるところはできるだけ任せ、難しいところをそっと支えました。相手の様子に合わせて、教え方や手伝い方を自分で考える６年生の姿がありました。

自分の願いを言葉にし、友達の考えに触れながら活動を選び、実現に向けて動いた１年生。そして、「どうすれば１年生が自分でできたと感じられるか」を考え、自ら関わり方をつくった６年生。

「６年生がいたから難しい飾りが作れた」という１年生の言葉には、自分の力と仲間の力を合わせれば、やりたいことを実現できるという手応えが表れています。いろんなところに「のび・わく・どん」の姿が見られました、と担任の先生は振り返られます。

先生たちが自らの課題をもち、対話しながら授業を見直すこと。そして、子どもたちの「やりたい」を受け止め、任せ、支えること。その積み重ねの中で、岡田小学校の「のびのび・わくわく・どんどん」が、確かな学びの姿となって表れ始めています。

